

# アロペシアXとトリミングの関連性（最新知見を含む）

アロペシアX（Alopecia X）は、主にポメラニアン、サモエド、アラスカン・マラミュートなどのスピッツ系犬種に多く見られる、原因不明の非炎症性脱毛症である。「毛周期停止症候群」「成人型脱毛症」などとも呼ばれ、皮膚炎や掻痒を伴わないことが特徴である。副腎性ホルモンや性ホルモン、遺伝、毛包幹細胞の機能不全など、複数の因子が関与していると考えられている。

## 1. トリミングとの関連性

従来は、バリカンによる極端な短毛カット（特に5mm以下）が毛包への物理的刺激や光刺激、乾燥を引き起こし、毛周期の再開を妨げることから、アロペシアXの発症・悪化因子とされていた。

しかし、近年の報告ではハサミ仕上げであっても発症例があることが明らかになっている。これは、毛包が休止期（telogen期）で固定化している犬において、被毛をカットすること自体が「成長期再開の刺激を奪う」可能性があるためである。つまり、「刃物によるカットの方法」よりも、「カット後に被毛がどれだけ短くなったか」「皮膚がどれほど外的刺激に晒されたか」「体質的に毛包が再生しにくいのか」の方が重要であるとされる。

## 2. 発症メカニズムの考察

アロペシアXの犬では、毛包幹細胞やホルモン受容体の働きが低下しているため、カット後の再生サイクルが再び起動しにくい。

そのため、ハサミでも被毛を短く整えた結果、被毛の再生が停止してしまうことがある。また、トリミング後の乾燥、紫外線、静電気、皮膚温度変化も毛包環境に影響を与えるとされ、これらの複合的要因が発症に関与する。

## 3. 獣医との連携と今後の課題

アロペシアXは美容上の問題に見えて、内分泌系・遺伝的要素を含む体質性疾患の一つと捉えられている。トリマーは発見者として早期に異常を報告し、獣医師と連携してホルモン検査・甲状腺機能検査などの実施を促すことが望ましい。治療としてはメラトニンやトリロスタンなどの投与、低出力レーザー照射（LLLT）による毛包刺激などが行われることがある。今後は、トリミング方法と発症率の関連をより定量的に評価する研究が期待されている。

## まとめ

近年の研究では、アロペシアXの発症は「バリカンの有無」よりも、「被毛の短縮度」や「体質・毛包環境」が大きく影響することが示されている。したがって、ハサミ仕上げであってもリスクが完全にゼロではなく、トリミング後の皮膚ケアと環境管理が極めて重要である。美しさよりも健康を優先し、獣医とトリマー、飼い主が一体となって取り組むことが、アロペシアXの予防と管理の鍵となる。